

震災から四年、宮城のいま

池川尚美

宮城県学童保育緊急支援プロジェクト

東日本大震災からまる四年。震災の影響は、地域や家庭の間に大きな格差を生み出しています。一月二五日（日）、宮城学院女子大学にて開催された第六回宮城県学童保育講座（主催・全国学童保育連絡協議会）の報告を兼ねて、宮城県のいまをお伝えしようと思います。

* * *

現在、仙台市の中心街は、震災を忘れたかのようになぎわいですが、津波の被害にあった地域はいまだに更地のまま。住民は仮設住宅から「災害公営住宅」にようやく移りはじめたところです。震災で家族や自宅、仕事を奪われた家庭の心労は容易に消えるものではありません。

子どもの貧困の課題は深刻です。震災後の経済苦、増えつつける離婚などの家族関係の変化は、困難の格差を広げています。また、DVの相談もあとを絶ちません。家庭の不安

定さが子どもたちに与える影響は、子どもたちのさまざまな行動となって現れています。

地域の担い手である子どもたちを大切に育てていくことは被災した地域の切なる願いであり、学童保育のニーズも増えつつけています。

一方、各自治体では、震災後の業務量の増加などから、職員の病休や早期退職が増え、残る職員にはいっそう厳しい環境となっています。県内の多くの市町で、指導員が確保できず、学童保育施設もまだ仮設のままというところもあって、担当課はそれらの対応に追われながら、同時に子ども子育て支援新制度（以下、新制度）施行に向けた準備を進めています。現場には新制度の情報がほとんど伝わらず、不安をつのらせているところも少なくありません。宮城県学童保育緊急支援プロジェクトでも、担当課への情報提供を積極的

に行ってきたつもりでしたが、厳しさは増すばかりです。

* * *

第六回宮城県学童保育講座では、新制度に関する国の動向についての最新情報を提供すること、指導員が日々の実践でなにができるのか、なにをしたらいいのか具体的なイメージを持つことをめざしました。

午前中の全体講義A「新しい学童保育をつくるための課題——国の新しい制度で、学童保育はどう変わるか」講師は、全国学童保育連絡協議会会長・木田保男さんでは、講座の数日前に公表されたばかりの国の予算案が提供されました。全体講義B「学童保育の生活づくりと指導員の仕事と役割」講師は、東京の指導員、全国学童保育連絡協議会副会長・千葉智生さんでは、実践事例をもとに、指導員に求められていることが話され、会場全体が講義

に集中して聞き入っていました。

参加者からは、「行政職員、指導員共にわかりやすい、具体的な説明でした。また、最新の資料もいただき、非常にありがたかった（行政職員）」「自分の資質を向上させるために、研修会などに参加して、よりよい保育ができるようにしていきたい（指導員）」などの感想をいただきました。

午後からは分科会と交流会。「1分科会／学童保育の施策と運営——各市町村・各施設の交流」では、木田さんを囲んで情報交換が行われ、「2分科会／今、学童保育指導員に求められていること」では、千葉さんの講義をもとに、指導員が悩みを出しあい、交流しました。「交流会／指導員として力量を高めるために」では、山形県の元指導員・後藤香子さんを進行役に、記録の取り方や検討方法など、各目的の具体的な取

り組みを交流しました。

「最新の動向を知ることができ、多くの刺激を得ることができた（研究者）」「『今の問題』を解決するためのヒントをいただけたことが、とても有意義な時間となった（指導員）」「一人の子どもを、何人もの指導員が目で見ることが意義があり、記録することは、自分自身を振り返り、子どもの成長を見ることができると、ぜひ記録をしていきたい（指導員）」という参加者の感想が寄せられ、私たちも成果を感じています。

* * *

全国各地から寄せられた「東日本大震災学童保育募金」により、参加費の援助ができたことは、成功の大きな要因です。被災地はいまだ厳しい状況ですが、全国の皆様のご支援により、今後も着実に歩を進めていきたいと思っております。